





「いやあ、まさか倅がこんな早くに結婚するなんてなあ。
しかもこんな別嬪を捕まえおつて……
年甲斐もなく嫉妬してしまうわ。わははw」

「もう、お義父さんったらお上手なんですから」

「いやいや、本当だぞう？」

「ミオさんのような美人、見たこともないw」

「もうずっとこの調子で、父はミオにデレデレだ。」

「そんな父に怒るでもなく呆れるでもなく、ミオは甲斐甲斐しくお酌を続けている。」

彼女はかつて大神ミオという名前で

アイドル活動を行っていたが、現在は引退しており、間もなくあなたの妻として籍を入れることになる。

今日はその挨拶として、

ミオを実家に連れてきたというわけだ。

あなたの父はひと目でミオを気に入ったようだった。

軽い挨拶だけのはずが酒盛りを始め、

人のいいミオは嫌な顔ひとつせず晩酌に付き合っている。

もうすっかり夜も更けてしまい、

この分だと実家に泊まっていくなかりそうだ。

「父さん、ちょっと飲み過ぎじゃないか？」

「何を言う、この程度で。美人の酒は悪酔いせんのだ。

お前こそ、もっと飲んだらどうだ？」

せつかくのめでたい席じゃないか」

「いや、俺はもう……」

あなたは赤ら顔を横に振った。

酒豪の父とは違い、あなたはお世辞にも酒に強いとは言えない。実を言うとさつきからもう頭がくらくらしていた。

「悪い……ちょっと、横になってくるよ」

「大丈夫？　うちも行こうか？」

と、ミオは立ち上がりかけるが、

「うおいミオさん、もう一杯頼むよ」

父が無遠慮にグラスを突き出す。

ミオは困ったような顔でこっちを見たが、あなたは薄く笑って頷いた。
俺はいいから、父の相手をしてやってくれと目で合図をする。

あなたは居間を出ると、自分の部屋のベッドで一休みするのだった。



何時間が経過したのだろう――
あなたは暗闇で目を覚ました。

近くにミオの姿はない。

まだ眩む頭を抱えながらのっそりと上体を起こす。

「まさか……まだ飲んでるのか？」

あなたはふらつく足で廊下に出た。

大して飲んでないのに頭がズキズキする。

電球の灯っていない廊下は薄暗くて、

あなたは壁に手を突きながらのろのろと進んでいく。

居間の襖戸から線状の明かりが漏れていた。

あなたはその光に吸い寄せられるみたいに

居間の中を覗き込んで――思わず絶句した。

「んほっ♡ おっおおッ♡
おオ♡ おんッ♡」

――えっ？



ミオが、父に犯されていた。

最初は夢かと思ったが、それは紛れもなく現実だった。

父はミオのデカケツを両手でしっかりと掴みながら、でっぷりと膨らんだビール腹を何度も叩きつけている。

その度にミオは下品な声で喘ぎ、尻尾をびーんと震わせていた。

「あッ♥あッ♥
ああア——ッ♥」

「おお、締まる締まるW
いいおまんこをしているじゃないかミオさん。
あいつにはもったいないわい」

「おっ……義父さん♥
やめっ、てください♥
ああッ♥ああ——ッ♥♥」



「こちらら。
あんまり大きな声を出すと
倅が起きてしまうぞw」

「だ、だめっ♡
こんなところ見られたら、うち……♡」

「だったら大人しく
オナホになってることだ」

「そんな♡

あつ、ぶつといのやだっ♡
イぐっ♡ イっちゃうから♡」

「またか？

ちよつと穿ってやっただけで
馬鹿みたいにイきまくりおって、
節操のないまんこだ。

それとも……倅とのセックスが
よっぽど不満だったのかな？

あいつは昔から粗チンだったからのう
無理もないw」

「ち、違っ♡
彼に不満なんて♡」



「強がっても、下のお口は正直だぞお？」

「あひん♥

お、おちんぽが♥
奥にぐりぐり当たってりゅ♥」

「ここを責められるのも

初めてのようだなあ……可哀想に
本物のセックスを知らないなんてなあ。
不甲斐ない息子に代わって
ワシがたっぷり教えてやろうなw」

「そ、そんなのいりません♥

だから、もう……ンほおツ♥
ぶつといちんぽでずこばこ
ピストンするのらめっ♥

そんなことされたら
うちのおまんこ、簡単に……ッ♥」

あなたは声を上げられずにいた。

愛しの彼女が目の前で乱暴されているのに、
見ていることしかできない。

そのくせ股間はかっついてないほどに勃起して、
ズボン越しに汁が漏れていた。



「お、お願いですお義父さん♡
もう、許して……♡」

このことは悪い夢だと思って忘れましますから、
取り返しがつかなくなる前に……♡」

「んー？
取り返しがつかなくなる、とは……
なんのことかなW」

「そ、それは……
なか、だし……♡」

「なんだって？
聞こえんぞお？
はつきり言え、おらー！」

「んほおおおオオオオ♡
な、中出ですう♡ お義父さんのおちんぽ
うちの中でびくびくして……
も、もうすぐ、射精するぞって言ってますう♡
でも、でもお……それ駄目なお♡
彼以外の精液なんて……♡」

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ



「なあに、気にするなW
ワシとあいつは血液型が同じだからなW
子ができても黙っていればわからんよW」

「いやっ♥ いやあっ♥」

「お、お願いですお義父さん♥
彼を裏切りたくないんですう♥」

「ぐふふ」

「いじらしいのうミオさんは。
堪らんわいW」

父は嗜虐心たつぷりの笑みを
浮かべながらミオを犯し続けている。

ミオは精一杯の抵抗をしているようだが、
その非力な細腕ではなんの意味もない。

むしろ、そうやって抵抗するほどに
父の興奮は増しているようだった。

「おお、登ってきたぞお……
金玉から子種が登ってきたぞ！」

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

ズンッ♡

はぁあ♡

あー♡

「ほれ！ 孕め！」

「いやあああああぁあッ♡♡♡」

ミオは娼婦のようなアへ顔を晒しながら
子宮に父の精液を受け止め、
また何度目かの絶頂に至った。

その結合部から
信じられない量の白濁液が噴き出し、
ミオの赤ちゃん部屋が父の精で
余すところなく埋め尽くされたことを知る。

「ンおおおお……オっほお♡
おッ♡ おッ♡ まだ…出てりゅ♡」

「くく、ミオさんは本当にいい声で鳴くのうw
そんなのを聞かされたら……」

「ひっ♡ お、お義父さんの……
全然、小さくなってない……♡
どうして……♡」

ズンッ♡

ズンッ♡

ゴッ♡

ズンッ♡

はあぁ

あーッ♡

父はその後も
繰り返しミオをレイプした――

ミオは謠言のようにあなたの名前を呼び、
助けを求めたが
あなたがその声に応えることはなかった。

それどころか
凌辱されるミオをオカズに
オナニーを始める始末だ。

「ごめん、ミオ……うっ！」

最高に興奮した。
かつてない量の精液が出た。

愛する人が肉便器となっていく姿に
あなたは得も言われぬ恍惚を
見出してしまっていた――

ズンッ♡

ズンッ♡

ゴッ♡

次の日の朝——
あなたはコンビニに行くと言った。嘘をついて家を出た。

少し時間を置いてから家に戻ると案の定——
父が、ミオに昨夜の続きを求めていた。

ミオを跪かせて、
その小さなお口でちんぽをしゃぶらせている。

「んじゅる♥ じゅずず♥
んぐつ、ぐぽ♥ ぐつぽぐつぽ♥」

「おお、いいぞおミオさん……
上手じゃないか」

「はあ、はあ……
早く、出してください……
彼が、帰ってきちゃう……♥」

ミオは早く終わらせようと、
はしたない表情で父のちんぽにぐつぽりと食らいつく。
その汚い音は、ドアの外から覗き見している
あなたの耳にもはつきり届いていた。



「早く、早く……
お精子、らひてえ……れろれろ♥」

「そんなに早く出して欲しいなら、
手っ取り早い方法があるぞ。

口ではなくおまんこを使えばあつという間だ。
主婦になるのなら

そういう時短テクも身につけんなW」

「そ、それは、できません……♥
あんなことは、もう……♥」

「お願いです、お義父さん♥

ミオのお口まんこで

しっかりザーメンぶっこ抜きますから♥
もう無責任レイプはしないで……♥」

「それならもっと気合入れて

しゃぶりついてもらわんなあ」

「は、はひい♥

んじゅるるるう♥ じゅるるっ……じゅぽっ♥

ちゅぢゅ、ぢゅぽぽっ♥

じゅるれろ、んじゅぽ……ぢゅる♥ ぢるるるるるう♥」



あなただって、ミオにフエラをしてもらったことくらいある。
ほんの数秒で果ててしまい、恥ずかしい思いをしたものだ。

あなたの知る限り、それ以来ミ才は一度も口淫をしたことなどないはずだが――

今の彼女のしゃぶりつぷりは実に堂に入っていた。

今の彼女のしゃぶりっぷりは実に堂に入っていた。

「ぐっ……そろそろ出さず。
しっかり飲め！」

「むぐううううう♡
んぐっ、んん……ごく、ごく、ごく♡」

躊躇うことなく
父のちんぽミルクを嚥下するミオ。

あなたのときは
ティッシュに吐き出していたのに――

「はあ♥ はあ♥
い、いっぱい出ましたね……♥
こ、これでもう……♥」

「ああ。これで満足……と、言いたいところだが」

「ひっ……やあああッ♡」

父はミオの身体を軽々と抱え上げ、
その陰裂を肉棒で貫いた。

「おー、これこれW
やっぱり堪らんまんこをしておるわW」

「ンほっ♡ おおお♡
ら、らめえ♡ 挿れないでえ♡
ひ、酷いですお義父さん♡
お口ですれば、おまんこは使わないって約束で……♡」

いま再び、あなたの目前で行われる、
愛しい彼女のレイプシーン。

はつきり言おう——待ち望んでいた瞬間だった。



「だ、だめえ♥

彼が帰ってきちゃううう♥

こ、こんなところ見られたら……♥

は

は

は

お

「あ、ああ……♥

らめ、らめらめらめええ……♥

お義父さんのぶつといので犯されたら
うちのおまんこすぐに服従しちゃうのお♥
あの人以外のおちんぽで
気持ちよくなっちゃいけないのにい♥」

「ぐふふ。お前さんのような淫乱は
倅の粗チンじゃ到底満足させられまい？
きっと散々溜まっていたことだろう……」

だからほれ、今だけは素直になりなさい。
ワシのちんぽとあいつのちんぽ、どっちがいいんだ？」

す

す

す

す

す



「そ、それは……♡」

「それは？
どうした、正直に言わんと
また中に出すぞw」

「うう……♡」

「お、お義父さんの方が、いいです……♡」

「お義父さんのナニがいいんだ？」

「ち、ちんぽ♡ ちんぽですう♡」

「お義父さんの逞しいおちんぽお……♡
あの人とは比べ物にならないのお♡」

「ぐふ。あいつが聞いたら卒倒しそうだな」

「いやあ♡ 言わないでえ♡」

「ああ、このことはワシとミオさんだけの秘密だよ。いいね？」

「は、はい♡ 秘密にしますう♡」



「いい子だ……ほら！
ご褒美を受け取れ！」

「んっほおおおおオオン♡」

ま、また中出しいいいい♡ だめなのがいい♡
 どうして、お義父さん……♡
 うち正直に言いましたああ……♡ 「」

呆れるほどの量の子種汁がどくどく注がれていくのが見える。

ミオは口でこそ「駄目」と言っているが、父にがっしり抱きついて腰をへこへこさせながら言ったところで説得力は皆無だ。

きつたない声で喘ぎながら、
全身で父の浮気ちゃんぽを受け入れていた――

——次の日。

「え……今日も泊まっていくなのかい？」

「う、うん。お義父さんが是非そうしなさいって……んっ♡」

ミオは顔を真っ赤にして、不自然に身体をくねらせている。

その隣には父が立っていて、ミオの尻に伸ばした手をもぞもぞと動かしながら、言う。

「義理とはいえ、もうすぐ父娘になるんだ……交流にはいくら時間をかけてもいいだろう？まだまだミオさんと話したいことがたくさんあるんだよ……ぐっふふW」

んっ♡

んっ♡

「そ、そう……」

ミオがいいなら俺は別に……」

「もちろんミオさんも
同意してくれてるよ。のう?w」

父の腕にぐっと力が込められ、
ミオは「ひゃい♥」と
ほとんど鳴き声みたいな返事をした。

ミオの表情は既に発情していて
父に「言わされている」ようには
見えなかった。

いっ
ぽい♥

ん……



「おんっ♡ おんっ♡ おうん♡」

「いかんぞおミオさん。

そんな大声を出しては倅が起きてしまうじゃないかw」

「だ、だってえ♡

このデカちんぽで突かれたら声我慢なんてできません♡

お、お願いしますお義父さん♡

せめて隣の部屋……か、彼のいないところで♡」

「ミオさんが静かにすれば

いいだけのことだろう……ほら続けるぞ!」

「んっほおオオ♡」

あなたは薄目を開けて
ミオの痴態を密かに傍観していた。

父は今夜も酒盛りを始めた。

そこであなたが酔い潰れた演技をすれば期待通り、父はすぐさまミオに手を出した。

あなたが近くにいるという興奮材料をオカズに、ミオのおまんこを我が物顔で貪っている。



「おッ♥ ごめん、なさい♥

うち♥ あなたのすぐ傍で♥

あなた以外のおちんぽ挿れられて♥

頭おかしくなるくらい、気持ちよくなっちゃってるう♥」

口では謝りながらも、

ミオはデカ尻を振って自ら父のペニスを求め続けていた。

「おいおいミオさん。

そんなに搾られたらすぐにイってしまおうぞ?」

「あんっ♥ らめれす♥

彼の前で種付けなんて♥」

「だったらその腰へコダンスをやめたらどうだ?」

「こ、これは、違うのお♥

うちは、やめなきゃやって思ってるのに……

か、勝手に腰が動いちゃうのおお♥

そ、それもこれも、お義父さんのちんぽが

気持ちよすぎるのがいけないんだからああ♥♥」



それはもはや

あなたの知っているミオではなかった。

あなたが知っているミオは

貞淑で慎ましく、理知的な女性だった。

しかし、今そこにいるのは

ちんぽで気持ちよくなること以外

考えられない最低のエロメスだ。

夫となる男の前でその父親のちんぽを求め、

あなたに内緒でこっそり

他人の子を孕もうとしている。

「あっ♡らめっ♡
おちんぽびくびくしてる♡

お義父さん♡

うちのおまんこでお精子どっぴゅんしようとしてる♡

に、逃げなきゃ……逃げなきゃいけないのにい♡

ケツ振り止まんないよお♡

だ、出されりゅ♡

彼の前で本気の中出しアクメ決めちゃいますうううううう♡「



「んっはあぁあぁあぁアアア——ッ♡♡♡

や、やっぱりこれ、ぎばぢいいいいい♡

噴水みたいな射精で
子宮ぶっ叩かれるの
最高なおおお……♡

でゅん♡

でゅん♡

おー♡

おー♡

こんなの知っちゃったら もう……
もう、戻れないよおおお……♡

ズン

ズン